

152. マクログロブリン血症の細胞形態

奈良県立医科大学第2病理学教室

○奥山隆三(CT), 今井俊介(MD)

螺良義彦(MD)

同 病態検査学教室

喜多悦子(MD)

骨髄腫は、免疫グロブリン分泌細胞である形質細胞が、悪性化を来たす腫瘍性疾患で、1850年MacIntyreにより初めて報告された。以後、骨髄腫の報告例は増加し、現在ではそれほど稀な疾患とは考えられないが、この疾患の類縁型に属するマクログロブリン血症の報告は今日においても非常に少なく、その発生頻度は骨髄腫の10%にすぎない。今回我々は、このマクログロブリン血症の1症例を経験したので、その細胞形態について報告する。

〔症 例〕

症例は72才、男性。昭和55年4月頃より全身倦怠感を自覚し、4ヶ月後、奈良医大第3内科へ入院した。入院後、全身リンパ節の腫大を認めるとともに血清検査においてIgMのM蛋白が出現したためマクログロブリン血症と診断、副腎ホルモン剤など治療をつづけていったが、急性心不全、腎不全を併発し、入院約20ヶ月後に死亡、剖検を行なった。

〔病理所見〕

全身リンパ節は腫大し、肝臓、脾臓、腎臓、小腸、後腹膜、骨髄に多くの結節状腫瘍が見られた。また、組織学的に、これらの腫瘍は、大部分リンパ細網系細胞で占められ、その他、異常形質細胞やリンパ球などが出現していた。

〔細胞所見〕

剖検後、結節状腫瘍の捺印細胞診を施行し、鏡検した。細胞は、核/細胞質比が大きく、大小不同が著明であり、核形は不規則で中心に位するなどの所見より、悪性リンパ腫由来の細胞形態を示した。しかし、核内所見において、赤染した大きな核小体を中心に顆粒状クロマチンが核膜に附着するように配列(いわゆる車軸状配列)している点より考えて、異形形質細胞の性質をも有すると考えられる。

つまり、本症例においては、悪性リンパ腫細胞と異形形質細胞の混合した細胞像が認められ、これは牛尾や小野寺などが述べているリンパ形質様異形細胞と考えられる。

153. 診断困難であった右膝関節部の横紋筋肉腫の1例

大阪医科大学中検病理

○日下部正(CT)、中野京美(MT)、石崎幸恵(CT)

坂本洋子(CT)、永滝靖子(CT)、森川政夫(CT)

内藤勝義(MD)、松本和基(MD)、黒川彰夫(MD)

稲井真弥(MD)

骨・軟部に発生する腫瘍の診断には、病理組織学的、細胞学的に極めて難渋することがしばしばあるが、今回我々は右膝関節部腫瘍の生検材料と同部関節液の組織学的、細胞学的検索によって形態学的特徴を見い出せなかったため、診断に極めて困難を来した症例を経験し、その後、数回の生検および摘出標本を精査した結果、横紋筋肉腫と考えられたので、その細胞像および病理組織像について若干の考察を加えて報告する。

〈症例〉27才、女性。

〈主訴〉右膝関節部腫瘍。

〈現病歴〉昭和57年12月本学整形外科において右膝半月板損傷のため外側半月板切除術を施行。術後創治癒が遷延し、不良肉芽の増殖を認めたため、昭和58年2月生検を行った結果、未分化胚細胞腫の転移あるいは滑膜肉腫が疑われ、同時に施行した関節液の細胞診でも非上皮性と思われる腫瘍細胞を多数認めたが、その由来の推定は出来なかった。同年5月大腿切断術および右鼠径部リンパ節郭清術を行い病理形態学的精査の結果、横紋筋肉腫と考えた。

〈細胞所見〉関節液は出血性背景の中に腫瘍細胞が散在性に出現、その細胞質は類円形を呈し、ライトグリーン好性、N/C比大、核は偏在、クロマチンは繊細で密、核小体は大型不整形なものを数個認め、核分裂像も散見した。PAS染色陽性、Alcian-blue染色陰性、さらに腫瘍捺印標本では均一な腫瘍細胞が散在性に出現する中に少数ながら多核形～楕円形の比較的豊富な細胞質を有する異形細胞を認めた。しかし紡錘形細胞や多核細胞は見出されず、起原不明の非上皮性悪性細胞と診断した。

〈病理組織学的所見〉生検では大小不同のある類円形核と明るい原形質を持った異形性の強い腫瘍細胞が充実性に増殖し、幅の狭い結合織によって分割され胞巣を形成している部も存在することにより未分化胚細胞腫の転移を考え、また一部では間隙形成が認められることより滑膜肉腫も考えた。しかし摘出標本ではPAS陽性、PTAH染色で横紋様構造を認め、さらに酵素抗体法でmyoglobin陽性細胞を散見したことにより胎児型横紋筋肉腫と診断した。

〈結語〉未熟な類円形間葉細胞が主体を占める、極めて診断困難であった胎児型横紋筋肉腫の細胞像と病理組織像について若干の考察を加えて報告する。